

中国社会文化学会 2020年度大会

2020年7月4日（土）

自由論題研究報告

オンライン開催

午前の部 10:30-12:30

隋唐皇帝の狩猟活動と田狩礼……………顔 逸凡(中央大学大学院生)

コメンテーター: 佐川 英治 (東京大学)

羅教の伝説新証——形成年代とその伝播に関する考察……………夏 雨 (東京大学大学院生)

コメンテーター: 浅井 紀 (東海大学名誉教授)

午後の部 13:30-16:30

『論語徴』の清代中国受容の一考察——劉寶楠の『論語正義』を中心に

……………蔣 薫誼 (東京大学大学院生)

コメンテーター: 伊東 貴之 (国際日本文化研究センター)

日本の雑誌メディアが伝えた中国国民革命——『中央公論』と『改造』を中心に

……………許 丹青 (岡山大学大学院生)

コメンテーター: 吉澤 誠一郎 (東京大学)

爵青と「近代の超克」——日本におけるドストエフスキー論との関連性を中心に

……………王 晴 (一橋大学大学院生)

コメンテーター: 中島 隆博 (東京大学)

会員総会 17:00-18:00 オンライン開催

主催: 中国社会文化学会

◆自由論題報告 7月4日(土) 10:30~12:30 オンライン開催

◇隋唐皇帝の狩猟活動と田狩礼

顔 逸凡

〔報告要旨〕隋唐時代の皇帝は、頻繁に狩猟を活動する。皇帝の狩猟の形式と狩猟に携わる人々の関係は、帝国の秩序のあり方を表現する。本報告では、『大唐開元礼』『隋書』等に記される皇帝の象徴的な狩猟活動を軍礼を構成する田狩礼に位置づけ、田狩礼と娯楽目的の皇帝の狩猟行為とを分けて分析し、両者の関連を考察してみたい。

本報告では、まず、田狩礼の定義を提示し、隋唐人の田狩礼に対する観念の曖昧さを明らかにする。次に、宮中で飼われていた狩猟に使う鷹犬等の動物のイメージから、皇帝の狩猟行為についての人々の認識を分析する。続けて、隋唐皇帝の狩猟活動と外交情勢、軍事支配の変遷との関連を探り、随従人員が減少し獵場が縮小していったことの意味を考察したい。

〔報告者紹介〕顔逸凡(イェン・イーファン)、1990年生。専攻は隋唐史。上海師範大学古典文献専攻、同大学院歴史文献学専攻卒。現在中央大学大学院文学研究科博士課程在学。論文「唐代皇帝田狩礼の特質——『易経』の「三駆」解釈史を手がかりに——」(『アフロ・ユーラシア大陸の都市と社会(中央大学人文科学研究所研究叢書74)』、中央大学出版部、2020年、93-133頁)。

◇羅教の伝説新証——形成年代とその伝播に関する考察

夏 雨

〔報告要旨〕明の成化から正徳年間、運糧軍人の羅清が羅教を創立し、後に羅祖と呼ばれた。羅教はまた無為教とも称され、明清の民間教派に深い影響をもたらした。羅教が誕生して以来、羅教に関する伝説が伝わってきた。伝説の主人公は羅教の創始者たる羅祖であったが、それ以外にも他の人物が登場することがしばしばあった。ここで、報告者はこうした類の伝説を羅教の伝説と称する。本報告では、羅教の伝説を記載した文献を整理し、特に2006年に河北省陽原縣揣骨疃鎮双塔村金山寺で発見された、羅祖の事績を記載した羅公塔碑を用いて、羅教の伝説の形成年代を従来の説より早いと主張する。また、その藍本についての考証を更に一歩進め、細部において先達の研究に対して少し補正を行い、そうして羅教の伝説の形成には地域性が伴うことを考察し、新しい結論を得たい。

〔報告者紹介〕夏雨(か・う)、1989年生。専攻は明清史。北京大学歴史学科卒。東京大学人文社会系研究科修士修了、博士課程満期退学。現在は大学院研究生として、博士論文を執筆中。主要論文は「漕運兵丁の中の羅教信仰についての研究」(『中国哲学研究』29、2017年)、「明清小説所見羅祖に関する伝説及び伝播——『聊齋志異』を例として」(『研究東洋』10、2020年)。

◆自由論題報告 7月4日(土) 13:30~16:30 オンライン開催

◇『論語徴』の清代中国受容の一考察——劉寶楠の『論語正義』を中心に 蒋 薰誼

〔報告要旨〕十八世紀の中国において、『七経孟子考文補遺』をはじめとする複数の和刻本漢籍が突発的に輸入され、空前の騒動をもたらした。日本で保たれた佚書及び和刻本漢籍の整理者・作者たる日本人の学問が清朝考証学者を驚かせ、彼らの著作に影響を与えた。その中、劉寶楠(1791-1855)の『論語正義』は清代『論語』注釈書の集大成と言われる著作であり、荻生徂徠(1666-1728)の『論語徴』を引用したことも広く知られている。しかし、『論語徴』が引用された箇所はまだ十分に検討されていない。

本報告は、『論語』述而篇の「子釣而不綱、セ不射宿」章・子罕篇の「子貢曰有美玉於斯」章・憲問篇の「士而懷居」章を中心にし、『論語正義』における『論語徴』の思想的な受容を考察する。徂徠の中国学術に対する影響、『論語徴』を含む和刻本漢籍の清代中国にもたらした変化を解明したい。

〔報告者紹介〕蒋薰誼(しょう・くんぎ)、1991年生。専攻は東アジア思想交流史、主に徂徠学と清朝考証学との思想交渉を考察している。台湾大学政治学部及び文学部卒(Double Degree)、同大学院政治学研究科中国政治思想専攻修士。現在、東京大学大学院人文社会系研究科博士課程在学。

◇日本の雑誌メディアが伝えた中国国民革命——『中央公論』と『改造』を中心に

許 丹青

〔報告要旨〕近代の日本において1920年代は中国への関心が改めて高まった時期であった。それはもちろん中国の政治的、思想文化的変化を対象とするものであったが、国内におけるデモクラシーの進展、そして国外にあつてはロシア革命の影響を背景とする現象であった。本報告においては、そうした中国への関心の高まりを国民革命に対する日本人、日本社会の理解、対応に日本のメディア、特に総合雑誌が果たした役割について解明してゆきたいと思う。一次情報を提供する新聞メディアと異なり、総合雑誌は日本政府の対外政策から影響を受けると同時に、政治社会問題に対する施策を講じ、論調を左右する役割を果たしたと考えられる。本報告では、大正期の民主主義の形成に大きな影響力を持った『中央公論』と1919年の創刊以来中国を独自の視点をもって見つめ続けてきた『改造』を中心とし、国民革命に対して同時代の日本が示した理解・対応の特徴を検討することを目指す。

〔報告者紹介〕許丹青(きょ・たんせい)、1989年生。専攻は日中関係史。江南大学(中国・江蘇省)外国語学部卒。現在岡山大学大学院社会文化科学研究科博士課程在学。主要論文

「1920年代雑誌『改造』における対「中国」言説——「ヤング・チャイナ」をめぐる」
（『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』45、2018年）、「バートランド・ラッセルの紹介を通して見た『改造』の対中国認識」（『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』48、2019年）など。

◇爵青と「近代の超克」——日本におけるドストエフスキー論との関連性を中心に

王 晴

【報告要旨】満洲国作家爵青（1917–1962）の作品にはモダニズム的な要素やキリスト教的な要素が含まれているため、英米の近代文学の影響を受けていると考えられており、西洋文学との関係が注目されている。しかし、その一方で、爵青は「東洋人の顔、本来の東洋人の様子を取り戻そう」と主張し続け、実際に「東洋人の復活」を熱望していたことも知られている。このような爵青の「東洋」的立場を如何に理解するかが、彼の文学理念を解く鍵となる。さらに、これらを解明することで、爵青の作品をモダニズム的な図式とは異なる別の経路で再考するだけでなく、当時の満洲国文学を立体的かつ歴史的な視点から考察できるであろう。本報告では、爵青のドストエフスキー論を考察対象にし、彼のドストエフスキー論と1930–40年代の日本文学界におけるドストエフスキーに関する批評との関連性を通して、爵青の文学思想が構築されたもう一つの道筋、すなわち「近代の超克」という脈絡の中で確立された「東洋的視点」を明らかにすることを目的としている。

【報告者紹介】王晴（おう・せい）、1986年生。専攻は満洲国文学。北京第二外国語学院国際伝播系卒。華東師範大学思勉人文高等研究院修士課程卒。現在一橋大学大学院言語社会研究科博士課程在学。日本学術振興会特別研究員（DC2）。国際日本文化研究センター特別共同利用研究員。主要論文「従内鮮一体到全民総動員：以梅娘的「僑民」為例」（『中國現代文学研究』12、2017年）など。